

日本の女子選手の寿命は短い。結婚、妊娠で、皆、あっ気なく去っていく。しかしカナダでは、ベテラン選手がマネージャー、トレーナーとしてベンチを守り、そこから、女子選手のプレーに対する主体性と歴史が生まれている。

いま思い返しても28歳でアイスホッケーに挑戦とは、無謀に近い行動であった。北海道育ちでスケートの体験はあるものの、もう10年も昔のこと。

保母の職業病である腰痛の回復にスポーツを薦められ、ためらうことなく女子クラブチーム「シルバースターズ」の仲間に入れてもらった。とても試合に参加できる望みはない。仕事からも家庭からも解放され、汗をかく快感に浸れる喜びだけ。滝刺と滑り、ぐんぐんと成長していく若い選手を横目に、私はマイペースでスケートを楽しんだ。

朝のうちに夕食を用意し、仕事から帰ると玄関先で肩の荷を、今度は大きな防具袋に替えて駅に向かう。こうした母親の週に1度、火曜の夜の外出が家族の生活にも馴染んできて、幼かった子どもたちも少しずつ成長し、笑顔で見送ってくれるようになった。

ベンチからレギュラーへとチャンスが巡ってきた。全日本大会は毎年、地方で開催される。八戸、福岡、釧路、日光、軽井沢と、その度に自費で参加。1週間、家を空けるため、冷蔵庫に食品を詰め、メニューを張っておく。職場で休暇をとるのも容易ではない。

しかし、アイスホッケーのためにチームメイトが交流を持てるのは、この期間だけ。私も、妻、母、から離れ、一人の選手として緊張と興奮の時、が得られる。

女子選手の寿命は短い。結婚、妊娠で、スター、はあっ気なく去っていく。そして再び戻ることがない。スケートの練習だけでやめていく人も多い。コイチのジム・西さんはいつも笑って話す。「もう200人以上教えたが、みんなすぐやめる。これでは強いチームが作れない」と。女子のクラブチームの存続は難しい。日系カナダ人の彼が15年間、チームを支えている。

3年前の春、私たちはアイスホッケーの本場・カナダへ遠征した。女子チームとして初めての試み、それも国内トップでもなく、練習のリンク代にもこと欠くスポンサーなしのクラブである。バンクーバー市での2週間の滞在先、対戦チーム、すべてジムさんが手配してくれた。

UBC（ブリティッシュコロンビア大学）のゲストハウスはホテル並みの設備にキッチンが付く。広大なキャンパスにあるプール、テニスコート、図

書館などを自由に利用できる。対戦相手は社会人2チームと大学、高校の計4チーム。

「日本からレイディースチーム来た」と地元新聞に大きく紹介され、試合会場にもたくさんの方が応援にきてくれた。リンク上に整列すると国歌が流れ、国旗がスルスルとポールを揚がる。感動して体が震え、涙がこぼれそうになる。試合は本場の実力を知ることとなり、1勝もできなかった。しかしチームから3人がベストプレーヤーに選ばれ、私もメダルを頂くことができた。



▲ノース・デルタ・ハイスクールチームと（最前列、左から4人目が著者）

試合のない日は各チームから家族ぐるみの歓迎パーティーを受け、ドライブや観光にも誘われ、彼女らの温かい

もてなしに2週間のキャンパスライフはまたたく間に過ぎた。

この遠征で、私は多くのことを学んだ。空港への送り迎え、宿泊先の世話、レセプション、試合の運営と、すべて女性たちの手で私たちは迎えられた。私の年代の女性は、選手としてだけでなくマネージャー、トレーナーとしてベンチを守る。そこからプレーする主体性と歴史が感じられた。

翌年、カナダで行われる初の女子世界選手権に日本からも選抜チームが参加した。選抜チームといっても遠征費の50万円は自費で、私達の2倍に相当する。何故そんなにお金がかかるのか。国内大会の代表者会議はいつも男性がほとんどを占め、女性の意見は少ない。カナダとの開きはあまりに大きい。

腰を痛めて、カナダ遠征を記念にやめるつもりでいたが、かえって勇気づけられ、多くの友人を得ることができた。時折り便りを交わすマリオンやナナのように現在、私も少しずつチームを育てる立場に身を置いている。

へこばやしじゅんこV保母、業界紙の記者などを経て、現在フリー。アイスホッケー歴11年。昭和25年生まれ。